

周辺の
みどころ

新開古墳群が造営された安養寺山の西麓の金勝川を見下ろす位置に古墳時代後期に形成された和田古墳群がある。横穴式石室を埋葬施設とする直径10m前後の円墳9基によって形成され、純金製の耳飾りやガラス製管玉、イモ貝で装飾した馬具飾りなどが出土し、渡来系氏族との関わりが考えられている。

古墳群は栗東市指定史跡の古墳公園として整備され、隣接する栗東市出土文化財センターと併せて見学できる。見学に関するお問い合わせは栗東市出土文化財センターまで。



和田古墳群と栗東市出土文化財センター

新開古墳出土船形埴輪

栗東市安養寺

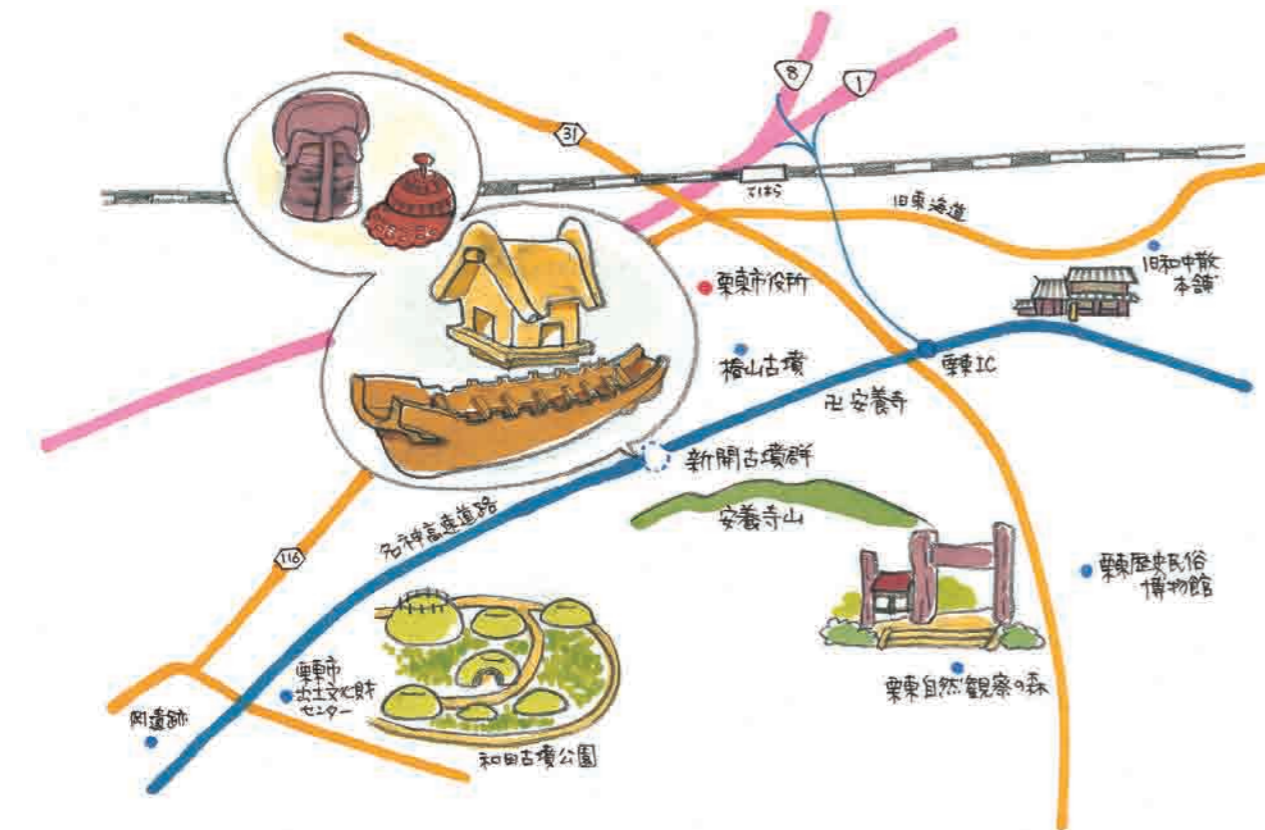
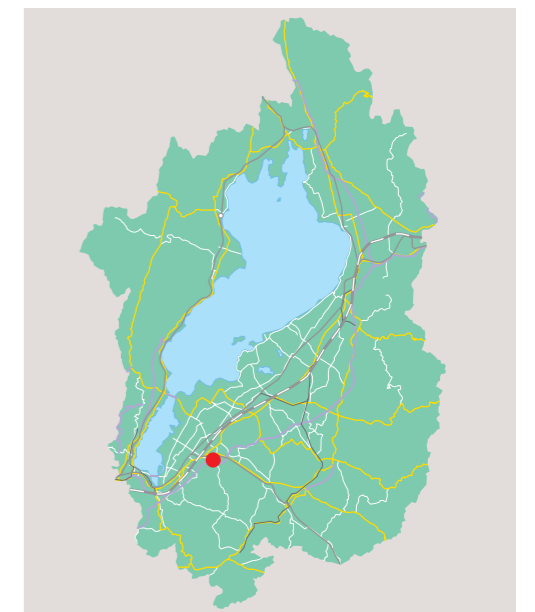


新開4号墳出土船形埴輪

かつて琵琶湖を行き交ったのはどのような船だったのか。縄文時代には丸木舟が使われ始め、古墳時代には丸木舟の側面に舷側板げんそくばんを継ぎ足した準構造船という船が出現する。県内の遺跡からは準構造船の部材が数例出土しているが、いずれも断片でその全体を復元するには至らない。

そのような中、栗東市新開4号墳出土の船形埴輪はきわめて精巧で、古墳時代の船の全体構造を知ることができる貴重なものだ。

またこの埴輪の出土からは、琵琶湖の水運を掌握した有力勢力の存在や、古代における琵琶湖水運の重要性が伝わってくる。



【アクセス】

●新開4号墳は名神高速道路を拡幅した時に見つかった古墳で今は見ることができない。船形埴輪は栗東歴史民俗博物館で保管・展示されている。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】 (関連文献/関連施設)

- 栗東歴史民俗博物館 Tel. 077-554-2733
- 栗東市出土文化財センター Tel. 077-553-3359
- 滋賀県立安土城考古博物館 Tel. 0748-46-2424
- 栗東町教育委員会ほか『1996年度栗東町埋蔵文化財発掘調査成果展』パンフレット
- 田中勝弘『古墳と寺院 琵琶湖をめぐる古代王権』



新開4号墳出土船形埴輪側面部分

新開古墳出土船形埴輪

所在地 栗東市安養寺

新開古墳出土の船形埴輪

古墳時代の船の構造を知る手がかりとして船形埴輪がある。栗東市新開4号墳出土の船形埴輪は5世紀中頃（古墳時代中期）のものである。船底部分は丸木舟同様の削り舟で、その上部に横板材を継ぎ足して船体を造って船の容積を大型化した準構造船と呼ばれるものだ。

埴輪の船端の片方は失われているが、復元された全長は115cmで、船底の削り舟部分は約100cmを測る。船幅は舷側板上部で27cm、船底では12.5cm。高さは船端で23cm、船体中央で13.8cmであり、全長約15~20m、船幅約2mの大型準構造船を精巧に模したものと推定されている。

船端の構造は舷側板を固定する豎板という部材が船底の削り舟部分から立ち上がり、削り舟の船端に直接取り付けられた状態で大きく突出している。船体上半部をつくる舷側板は線刻によって2段に表現され、オールを

装着するためのピボットという突起が船体上端の左右対称位置に7箇所ずつ付けられている。国内で出土している船形埴輪の多くもピボットを表現しているが、その数は4~6対で、7対のピボットを持つこの埴輪は中でも最大級のものである。

また、この埴輪からは船の内部構造も見て取れる。船底の中央には縦方向に仕切り板状の構造物が5~6cmの高さでつくられていて、その上面には直行する向きの横板が、舷側板が乗る削り舟上端部分に取り付く位置に設置されている。その数はピボットと同じ7箇所、オールを漕ぐ際に腰を据えるためのものと見られる。

この船形埴輪に表現された実物の大型準構造船には50~60人が乗れたという見方がある。当時の琵琶湖を行き交う船がこの準構造船のようなものであったなら、いかなる人が乗り、またいかなる物資が積み込まれていたのだろうか。



新開4号墳出土船形埴輪(正面)

新開4号墳と安養寺山周辺の古墳群

船形埴輪が出土した新開4号墳は、栗東市の安養寺山の北西丘陵部に形成された古墳群の中の一基で、名神高速道路の拡幅工事で見つかった。一辺約15m前後の方墳と見られ、確認できた周溝の一部から多数の円筒埴輪とともに家形埴輪も出土している。切妻造りの屋根の両端に大振りな破風板を持ち、その下部には突出する棟木も表現された立派な建物である。

これらの形象埴輪を持つ新開4号墳は、鏡や武器、甲冑、馬具など朝鮮半島との関係が考えられる副葬品を出土した新開1号墳に近い位置にある。これらの安養寺山北西麓にある古墳とその周辺の平野部に分布する岡山古墳や大塚古墳、出庭亀塚古墳、地山古墳、下戸山古墳などからなる古墳群は安養寺古墳群とも称されており、野洲川右岸に形成された



新開4号墳出土家形埴輪



新開3号墳発掘調査状況

大岩山古墳群に対峙する野洲川左岸勢力の存在を顕示している。

船形埴輪から見た古墳の被葬者と琵琶湖の水運

全国で出土している船形埴輪の数は21例。その約8割は大和と河内にある5世紀代の大王墓に從属する比較的小型の円墳もしくは方墳からの出土である。そしてそれ以外のほとんどが日本海や日向灘などの水運路に面し、新開4号墳もまた琵琶湖を見渡す位置にある。

これらの古墳の被葬者は、畿内の王権が活発に大陸との交渉を進めた当時、水運を掌握する職掌を担っていた者だったと見られている。新開4号墳出土の船形埴輪は琵琶湖の水運が政権に重要視されていたことの証であり、野洲川左岸の勢力が琵琶湖の水運を掌握していたことを示すものでもある。